

本号の概要

本号は、2006年9月30日(土)に名古屋大学で行われたワークショップ「私のフィールドワーク：転がり続ける渦中からのながめ」での議論をもとに、各登壇者の発表、ディスカッションでの議論を再構成した原稿に、参加者の一部の方に寄稿いただいた原稿を加えたものである。企画の内容は下記のものであった。

「私のフィールドワーク：転がり続ける渦中からのながめ」

日時：2006年9月30日(土) 12時～17時半

場所：名古屋大学 VBL ミーティングルーム

登壇者

(趣旨説明)

荒川 歩 (名古屋大学)

(司会)

徳田治子 (お茶の水女子大学)

(話題提供)

松嶋秀明 (滋賀県立大学)

大倉得史 (九州国際大学)

松本光太郎 (名古屋大学)

企画趣旨

フィールドワークとはどのような営みののだろうか。フィールドワーカーとしての私はとどまることはない。そして、時間を経て初めて、当時の私には見えなかった何かが見えてくることもあるだろう。

本企画では、質的研究と呼ばれる実践を行ってきた3人からの話題提供を肴に、フィールドワークという実践について、改めて濃密に語り合いたい。この3名の登壇者は、日本の質的研究/フィールド研究が大きく変化を遂げる中で、同時代的にそれぞれ独立して登場してきた研究者たちであり、皆それぞれ違った立場や質的研究観を持っていると思われる。この3人の登壇者のそれぞれの立場や見方の違いを浮き彫りにすることで、フィールドワークにおける質的研究のさまざまな可能性を考えたい。

学会年次大会のシンポジウムやワークショップは、限られた時間において完結することが求められる。また、半匿名の相手と議論しなければならないため、否応なく当たり障りのない議論に堕ちていってしまう。しかし、フィールドワークに関して、そろそろラディカルに語られる時期に来ているのではなかろうか。

フィールドワークとは、実践者が客観主義的に静的な位置に立つのではなく、実践者自身が事象に巻き込まれ転がり続けながら、かつその内部において「書く」という実践を行っていることを指すと思える。話題提供をされる3人には、転がり続けている渦中の中間報告として、自身のフィールドワークという営みに関して語っていただきたい。

参加者として想定しているのは、積極的に議論に加わりフィールドワークという実践に関して、「私のフィールドワーク」として思考を深めることを希望される方としたい。内容的には、入門編というわけにはいかないが、フィールドワークをはじめたばかりの人にも、ぜひご参加いただきたい。

主催：てんむすフィールド研究会

後援：日本質的心理学会研究交流委員会